

# 漂着物 アート展 2021



令和3年  
6/11(金) - 7/4(日)  
10:00 ▶ 16:00 火曜日休園

会場 氷見市海浜植物園  
2階ワークショップルーム

漂着物アート展  
観覧無料

プロデュース/富山大学芸術文化学部 長田 堅二郎

[主催]氷見市海浜植物園指定管理者アクティオ株式会社、(公財)環日本海環境協力センター

[後援]富山県、富山大学芸術文化学部、(公財)とやま環境財団 [協力・作品制作]富山大学芸術文化学部



## 富山大学芸術文化学部生 作品一覧

# 最優秀賞



## Dead tree

久世 さくら

漂着ごみのほとんどは陸から出ていることを知り、海だけの問題ではないと考えた。そこで、陸のものを作りたいと考え、“枯れ木”を制作した。海が汚れているということは、それだけ陸も汚れているということを表現した。

制作する上で意識したことは、人工物と自然物のごみを調和させることだ。ごみの形が見えすぎてしまうと一体感が損なわれるので、ごみ同士を絡ませる、接着するなどの工夫をした。

# 優秀賞



## 迷子

寺嶋 ころろ

漂着物を目の前にした時「ゴミだ、いらぬ」と思った。

モノに求める何かを包んだり、飾ったり、支えたりする「役割」がもう無いからだ。

役割のないこれらはひとまとめにゴミとして扱われる。

私はかわいそうだと思った。

これはずっと海をさまよう足だ。

# 優秀賞



## sea planks

藤井 朱里

海岸で拾い集めたプラスチックや陶器の破片は、海や川の水で研磨され、角がとれたやさしい形になっていた。砂浜で日光にさらされて、色味も淡く変色していた。人が作ったものに、自然はおおらかに変化を与えていて、どこか有機的な雰囲気をもった漂着物に魅力を感じた。素材ひとつひとつの色や形状のおもしろさが際立つよう、石膏の上に配置した。

# 奨励賞



## つめあわせ

朴木 新

あなたにはこの箱の中身、何に見えますか。

私は「窓からの景色」に見えました。

# 奨励賞



## むしゃくしゃ

村松 耶久子

今の現代の生きづらさによる生き物のむしゃくしゃした気持ち表現した。人間もコロナウィルスで本来の生活が失われてむしゃくしゃしているように海の生き物も漂流物が海に流され本来の生活が失われ同じような気持ちを抱いているのではないだろうか。満杯のゴミ袋から生き物の足のような手のようなものが飛びだし痲癢を起こしている

# 奨励賞



## たからもの

大橋結花

たからものをコレクションする子供をイメージした。実際に海を訪れ漂流物を採集したとき、生活の中で出たゴミや何かの破片を一つとっても、様々な色や形があることに気づいた。これらは子供にとっては珍しいもの、興味のあるものなのかもしれないと考え、この作品を制作した。子供のもつ汚れのない純粋な好奇心と、その好奇心の対象は漂流物だという現実。この皮肉を作品を通して感じ、海の漂流物の現実を知ってもらいたい。

# 奨励賞



## ぼくのいえが！

橋 夏海

私たち人間に住む家があるように海で生活する生き物たちにも海という家があります。しかしその家は多くのゴミによって住みづらいものになっています。尖った破片、絡みつく紐、食べ物と間違えてしまいそうな小物・・・どれも生き物たちにとって危ない物ばかり。そんな漂流物で作上げた家を見て生き物たちの海での生きにくさを感じていただきたいです。



# 奨励賞



## うみのおはなし

福西里桜

ゴミの化け物が海から現れ、海の生き物たちが逃げていく様子を飛び出る絵本で表現しました。人間が捨てたゴミによる海の生き物たちへの影響や海水の汚染問題を知ってもらうきっかけになって欲しいと思い制作しました。絵本にすることで、この場面の前と後の様子を想像することができると思いました。この場面の前の海はどんな海だったのか、この後この海はどうなるのかなど、海のゴミ問題について考える機会になって欲しいです。



## からまる、あふれだす

安倍凜伽

海岸には多くの漂流物が漂着しているが、私は実際にその漂流物が漂着する瞬間や、海のなかを漂っているところを見たことがない。そこで、様々な場所からやってきた漂流物たちが、互いに海のなかで絡まり合い、海岸に打ち上げられていく様子を想像し、海の底から漂流物があふれだすイメージで抽象的に表現した。



## タダヨイ

宮田 かの

部類:不明

生息地:不明

体長:約1m

氷見海岸で発見された漂着物を纏った生物。食事はせず、欠けた部分を海岸にある漂流物で補う。



## 矛盾

長谷川凜子

漂着物は私の中でゴミというマイナスの意識に置かれます。それをアートと言うプラスの意識で表現してしまう。罪悪感が生まれるような複雑な気持ちを持ちつつ制作しました。

燃やしても大気中のCO2が増加せず、生物分解する麻の紐をベースに編み、それに漂着物を紛れ込ませることで、制作する上で生まれる複雑な心境を表現しました。

この表現を見た人は漂着物に対してどのようなイメージを受け取るのでしょうか？



## 悲しい原材料

干場 彩華

漂流ごみを食べてしまう海の生き物たち。  
彼らの身体に取り込まれてそのままになってしま  
う、そんな本当はいらぬ身体の一部に着目  
し本作品を制作した。



白

横山 ななみ

海岸で漂着物を拾っていると白い漂着物が埋もれていると気づいた。そこから漂着物が流れ着いた海岸の姿を「白」で覆うことで再現した。



## 海の剥製

本多 志穂子

漂流物が海の吐き出した中身に見えたこと、自分自身が昔から海に対して抱いている「好きなもののひとつだけれど、いきものようで恐ろしい」という気持ちをもとに、「いきものとしての今の海を剥製として残そうとしたらどうなるのか」を主題として制作しました。本来ならば流木や貝殻などの自然のものだけで構成されるべき体が、飲み込まれた人工物によってすっかり別の体になってしまっている様子を表現しています。



## つながっていく

西野入 萌利

海の漂着物は、私の生活とあまり関係ないように思っていた。しかし、見ていくと漁業に関するものなど、無関係とは思えないものも多くある。

この作品は、海で拾った漂着物をビーズのように繋げ、ひとつひとつを誰かの生活や何かの出来事に見立てた。ビーズをひもに通していくと、となり合わないもの同士は触れない。だが、同じひもでつながって色や形を作っている。そんなビーズの連なりのように、私たちの暮らしと海は直接的に関わらなかったとしても、どこかで繋がっているのではないか。